

・村上春樹さんを引用

作家の仕事はこの「地下室の下の地下室」に入り込み、また戻ってくることです。少なくとも村上さんはそう害いている。この「地下室の下の地下室」に入るためには、それなりの技術が要る。それは「地面に穴を掘る」というタイプの肉体労働に近いものだと村上さんは書いています。

鑿(のみ)を手につつと岩盤を割り、穴を深くうがっていかないと、創作の水源にたどり着くことができない。小説を書くためには、体力を酷使し、時間と手間をかけなくてはならない。作品を書こうとするたびに、いちいち新たに深い穴をあけていかなくてはならない。しかしそのような生活を長い歳月にわたって続けているうちに、新たな水脈を探り当て、固い岩盤に穴をあけていくことが、技術的にも体力的にもけっこう効率よくできるようになっていく。

これは村上さんが自分の創作のスタイルについて、かなり率直に書いた部分だと思えます。そのとき、「地面に穴を掘る」「水脈に達する」という比喩を使う。ほとんどつねにこの比喩を使うんです。ただ「小説を書くことは肉体労働である」と言いたいのなら、「家を建てる」とか「道路を通す」とか「鉄道を敷設する」とか「缶詰を作る」とか「株券を売る」とか、いくらだって他に比喩があります。でも、村上春樹は小説を書くというときには「地面に穴を掘って水脈に突き当たる」という比喩しか使わない。これは非常にたいせつなポイントだと思います。それが作家の実感なんでしょう。穴を掘ると、運がよければ水脈にぶつかる。そこから「何か」が湧出してくる。それをすくい上げる。それが書くことだ、という作家の実感を僕はそのままに受け取りたいと思います。

別のところで、村上さんは『羊をめぐる冒険』を書き上げたときに、プロの作家として生きていけるという手応えを感じたと書いていますが、そのときも「鉱脈」という比喩を使っています。

・ものを書くには体力が要る

村上春樹の本は今世界中の言語に翻訳され、世界中の何千万という読者が彼の新作を待望します。そんな作家は今のところ日本には彼しかいません。その村上さんが、「自分の天才性をどんなふうに考えていますか」というわりとストレートな質問に対して、自分はごくふつうの、平凡な人間だけれど、作家としての才能がもしあるとするならば、それは深く内側に入って、わけのわからない暗闇・異界にまで突き抜けていって、そしてまた戻ってくるのできる技術を持っていることだろうと語っている。この技術を鍛えるために、とにかく三十年たゆまぬ努力をしてきた、と。

その基本は体力づくりから、というのも僕は深くうなずいてしまうんです。皆さん笑ってますけれど、ものを書くには、とにかく体力が要るんですよ。固い地面に穴を掘る作業なんですから。その比喩がくりかえし使われるというのは、それが作家の身体的実感だからです。つるはしでごんごん掘る。毎日ちよつとずつ掘る。一気に、突貫工事で、というわけにはゆかない。それでは深い穴は掘れない。ずうっと掘ってゆくと、あるところで、急に固い壁が剥落して、ずっと空洞に突き抜けると、そこに地下水脈がざざあ流れている。その流れに手を突っ込んで、「ああ、ここに流れがあった」ということを確認したら、また穴を抜けて、戻ってくる。

村上さんは朝四時頃に起きて、五時くらいから書き始めて、十時くらいまで集中して書く。五時間集中して書くとクタクタになる。それからご飯食べて、ランニングしたり泳いだり、音楽聴いたり、映画見たり、夜になったらお酒飲んで、夜十時になったら寝ちゃう。そしてまた翌朝四時に起きて、五時から仕事を始める。そういうサイクルで三十年やっている。

・読書を、ラーメンを食べる楽しみに例えるとわかりやすい。

電子書籍によって紙の本がなくなってしまうという人がいますが、そういうことを言う人は本をあまり読まない人じゃないかと思えます。いや、最新の情報にキャッチアップするために、情報入力のために本を読むことはするけれど、わくわくどきどきしながら時間を忘れて没入するために本を読むという経験があまりない人じゃないかと思えます。

ご飯を食べるのだってそうでしょう。真っ暗な部屋で、テーブルに置かれた大皿からラーメン啜って食べても、ぜんぜん美味しくない。あれは、あとどれくらい汁が残っているかとか、二枚

目のチャーシューはそろそろ食べてもいいだろうかとか、最後の一口を口中に投じるときの麺とメンマのバランスは頃合いであろうかという、全体のプログラムの中で腹具合を按分しながら食べるから美味しいのであって、あとどれくらい麺や汁やチャーシューが残っているか「わからない」まま真っ暗なところで食わされても美味しくもなんともない。

僕たちは本を読むときにただ情報を取り入れるためだけに読んでいるわけじゃありません。わくわくしたくて読んでいます。そのわくわく感というのは、ラーメンを食べるときに、つるつる食べ進むにつれて、食欲がしだいに満たされ、最後の一口をごくりと嚥下するとき空腹痛感がぴたりと収まるように計画しながら食べるときと同じで、自分で無意識のうちに「快樂の下絵」を描いているから得られるものなんです。

・想定読者

僕はもうずいぶんたくさん本を害いています。七〇冊くらい害いたと思います。それだけ書くと、固有の文体というものができます。どういう単語は漢字で書いて、どういう単語はひらがなに開くとか、句読点の打ち方とか、副詞や形容詞についての好みとか、そういうことについては「決まり」ができます。あるいは一つの文の長さについても、何となくリズムがある。短い文がばんばんと続いた後には、ちょっと息の長いフレーズを置くとか、ややこしいロジックで文を運ぶときは、途中で、「コーヒブレイク」的にカラフルな喩え話をはさみ込むとか。そういう言葉づかい上の「決まり」はかなり堅牢なもので、コンテンツにほかかわりがない。そうすると一度そのリズムに「乗る」と、しばらく**一気に筆が進む**ということが起こります。坂道をざっと滑り落ちるように筆が走る。そのときは、もう誰が書いているのか、よくわからない。自分が書いているのか、言葉が自己増殖しているのか。

そして、想定読者がいます。その人を宛て先にして書く。その具体的なイメージがないとばんばんと畳みかけるようには書けないんです。想定読者がいないテキストというのは、なんだかもごもごする。どこを見ているのかわからないで、眼を宙に泳がせてしゃべっている人の口調のような、ぼんやりしたものになる。まっすぐアイコンタクトして「わかるよね」と表情で視認しながら話を進めないと、スピードが出ない。

・日本の人文科学にはあまり期待しない

僕自身は率直に言って、日本の人文科学にはあまり期待しないという立場です。人文科学、社会科学、自然科学という古典的三分類がありますが、やはり日本でも理系は比較的元気がいい。毎年のようにノーベル賞受賞者が出てますね。理系で、先端的な研究をしている人は生き生きしている。僕がこの十年くらいの間に知り合った人たちで面白い人たちは、全員理系です。養老孟司、福岡伸一、茂木健一郎、池谷裕二、三砂ちづる、池上六朗、岩田健太郎、仲野徹、池田清彦、春日武彦、名越康文……挙げてゆくときりがない。特に医療関係の人が多。精神医療、脳科学、疫学。僕は典型的な文系ですから、自然科学のことはほとんど何も知りません。でも、彼らから話を聞いているだけで、知的に興奮してきて、頬が紅潮してきて、体温がちょっと上がる。本当にそうなんです。そういうふうには体温が上がるくらいに**知的に興奮するという経験をこの十年間、社会科学・人文科学の研究者に対して抱いたことは残念ながら一度もありません。**

僕は仏文学会を何年前かに退会しました。その前、学会誌の編集委員を四年間やっていました。若い研究者たちの学会発表を聞いて、それを査定して点数をつけるという仕事です。担当は二十世紀の思想と文学。これから研究のキャリアを始めようという若い仏文学者たちの発表を集中的に聞いた。そしてこの学会には先がないと思いました。

・学問のたいせつな仕事

ある分野の学問をして、特殊な技能や知識を得た。それを専門家同士で、「どっちができるか」「どっちがたくさん知ってるか」を競うことで時間を潰すよりも、そういう知識や技能を持ち合わせていない人たちの利用可能なかたちにすることも学問のたいせつな仕事ではないのか。僕はそう思っています。でも、僕のように考えている人は文学研究の世界には、ほとんどいません。

僕はずいぶんたくさん翻訳を出しています。翻訳することが大好きだったから。でも、翻訳というのは研究業績としては評価が低いんです。一〇〇〇ページの本を一冊翻訳するより、一〇枚のレポート・ペーパーを書くほうが、業績評価としては点数が高い。